

中退経験の意味づけとライフコースの分岐

——中退後の派生的困難をめぐる語りに着目して

○樋口くみ子（一橋大学大学院）

山田哲也（一橋大学）

1. 問題の所在

日本型経営と日本型福祉社会が崩れ、学校から労働市場への移行が困難となりつつある。他方で、個人化の進展とともに価値観も多様化し、若者は様々な生き方を模索している。そうしたなかで若者の移行支援に対する政府・行政の関心も高まりをみせている。

若者の移行の支援を検討していくうえで、就業や学業従事の有無といった点は、ひとつの指標として有効である。例えば、高校を卒業した若者を対象とした乾たちの調査研究では、調査対象のうち就業形態や学業の継続の有無といった点で「不安定化」にさらされている者の多くが「学歴・ジェンダーなどの構造的要因で不利な状況におかれている者達に偏って、それは出身階層の影響も受けている可能性が高い」（乾，2010，p.173）ということが明らかになっている。

しかし、こうした客観的な基準とは別に主観的な基準での困難も把握しておく必要がある。それにより、例えば経済的に恵まれており、ある程度の学歴を獲得した者などが抱える困難の把握も含めて、より充実した若者支援に繋がるからである。そこで本報告では、一見すると「不安定」な状態にいる高校中退者を対象に、彼ら／彼女らの意味づけにもとづきながら、困難を抱える・抱えにくいケースを分類し比較することで、高校中退者のなかでも誰が困難を抱え、どのような支援が必要となるのかを明らかにする。

2. 調査の概要

分析には東京都教育委員会が実施した2010・2011年度の都立高校中退者および進路未決定者調査の一環として行われた聞き取り調査データを用いる。聞き取りは2012年9月から2013年1月にかけて行われ、53人分のデータが得られた。分析には、このうち進路未決定者5人を除く高校中退者48人の聞き取りデータを用いる。対象者の年齢は16～26歳（平均18才）である。

3. 高校中退者のライフコース

ここでは分析に先駆けて①対象者全体のライフコースのパターンと、②その分岐をうながす諸要素を整理しておきたい。要旨では紙幅の都合から、第一段階の分岐および第二段階の主なコースへの分岐をうながす諸要素のみ示しておく。

①退学後の動向にみるライフコースの分岐

高校中退の時期は学年的にも時期的にも対象者によってさまざまである上に、調査対象の中には退学後1年に満たない者もいる。ここではそうした状況をふまえ、高校1校目中退直後から1年間の諸行動についての語りにもみられた本人の初発の動機をもとに第一段階の分岐を区分し、それ以降の段階の分岐は結果にもとづきながら調査対象者のライフコースを整理した（図）。

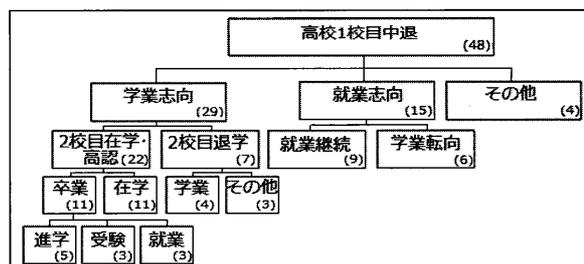


図. 退学後のライフコース（括弧内は人数）

②ライフコースの分岐をうながす諸要素

「学業志向」（29名）の若者には、退学当初から転学を希望していた者、年度途中で退学になり翌年度の再入学までの空き時間にアルバイトをしたケースも含まれる。学業への移行が可能となった背景には学校の紹介も少なくないが、退学前に自分で次の学校を探していた者も比較的多く見られ、18・19歳時に大学・専門学校に在籍する者が5名、18歳未満で飛び級的に高卒認定試験に合格し大学受験を待つ者も3名いる。

「就業志向」（15名）の若者は、高校在学中に働き始めたアルバイトに退学後も従事する者（6名）、知人の紹介で従事する者（3名）といったように、その過半数が比較的容易に就労へと移行している。また、彼らの周りの家族・友人・先輩には高校中退者も少なくなく、中退後の生活に関する情報が入りやすい環境にある。

「その他」（4名）の内訳はばらばらについていた

め考察が難しいが、少なくともそのうち2名は学校に行かずにずっと友達と「遊んで、で、妊娠発覚して、それで退学届正式に出して」【事例10, 19歳女性】といったように、在学中にすでにゆらいでいた学生役割が親役割の獲得を機に崩れ、退学かつ子育ての道へと進んでいる。

4. 困難を抱える若者たち

調査対象48名のなかでライフコース上の困難を抱えているのは計5名である。具体的には、本人自身にこの先進む道が見えず不安を感じているケース(事例2, 6, 9)と、進む道が見えながらも本人の希望通りに物事がなかなか進まないケースとの二種類(事例3, 4)がある。

【事例2, 20歳男性: 学業志向→2校目在学・高認→卒業→就業】先の事は「想像ができない」し、「どうするのか」という「方法が見つからない」。

【事例6, 18歳男性: その他】将来のことは「なるべく考えないようにしてる」。

【事例9, 18歳男性: 学業志向→2校目在学・高認→在学】「この先の未来がもう不安なんだから、遊びほうけるときはめっちゃ遊びほうけていたい」。

【事例3, 17歳女性: 就業志向→就業継続】「なるべく早く、何かお金ためて(友達と)2人で暮らそう」とするがバイトは「ほとんど首」になる。

【事例4, 22歳男性: 就業志向→学業転向】「大学に入れるぐらいの」「基礎学力」が必要と、大学中退後に高校に入り直す再び中退する。

ここで留意したいのはライフコースの種別を問わず、一部の者に困難が見られる点である。果たしてそれぞれのライフコースのなかで、どのような諸条件が折り重なった際に困難が生じるのだろうか。次節ではこの点を検討する。

5. 高校中退の派生的困難が生じる諸条件

①就業をめぐる困難が生じる背景

高校中退後に就業を志向するうえで困難が生じてしまう背景には、少なくとも以下の三要素が影響している。第一に周囲にブルーカラー層や中退経験者がいないことが挙げられる。例えば中退者の両親が高学歴であるという状況は、ライフコースの準拠先が見つからず、いわば道なき道を歩むことになってしまうため、負の影響として働いてしまう【事例4】。第二に、高校中退以前にアルバイトに従事していないことが挙げられる。中退以後にすぐに就業している若者たちの多くは高校退学以前にアルバイト先を見つけているが、高学歴高収入など生活が安定した家庭に育った若者は中退以前にアルバイト経験を十分につめていなかたりする【事例4, 6】。ただし、第一の要素と第二の要素がなくとも、「サボってやめ

るといった仕事への向き合い方を身につけた場合は【事例3, 9】、困難が生じることもある。

②学業をめぐる困難が生じる背景

高校中退後に学業を志向するうえで困難が生じてしまう背景には、少なくとも家庭の経済力が影響している。この場合の経済力は、家計を助けるためにアルバイトをする必要はないが、かといって大学進学するほどの収入に恵まれていない程度の経済力を指す。例えば事例2は、アルバイトもやめて学業に専念したお陰で高校中退後に間を空けず2校目に転学し、在学中に高卒認定試験合格も果たし、いざ大学受験となった時点で、大学の入学金を出すのが難しい、家の借金で奨学金も借りられずといった状況に見舞われている。

6. 今後の中退者支援に向けて

高校中退者は一見すると多様なライフコースを歩んでいるようで、その背景には出身階層の再生産に関する引力と斥力、友人・先輩といった社会関係資本の有無が大きく働いている。皮肉なことに、再生産を超えて独自のライフコースを歩もうとする際に派生的困難が現れやすくなる。出身階層の制約を超えて学歴獲得とは異なる道を進もうと歩み始めた中産階層の若者が失敗と挫折を繰り返すなかで次第に問題の原因を自己の学力不足に還元するケース【事例4】はその一例である。ここには、社会階層という「集団的問題を個人的行動で解決しようと試み、避けがたい失敗の責任を自分で負おうとして」もがき苦しむ若者たちの「認識論的誤謬」がある(Furlong, 1997, p.275)。

それでは、こうした困難を抱える若者たちに対して今後どのような中退者支援が考えられるだろうか。少なくとも第一に、対象者として重点化すべきなのは、とりわけ家族と異なるライフコースを歩もうとする若者への支援である。彼らは自身が思い描くライフコースを歩むために必要な諸資本に乏しい。したがって、第二に、支援内容として必要なのは、個々人の家族背景を考慮したうえでの諸資源の提供である。例えば就業を希望する場合は、単に仕事を紹介するだけでなく、同様の趣向をもつ若者たちの交流の場を提供するといったことも必要になるであろう。

＜参考文献＞Furlong, Andy and Fred Cartmel, 1997, *Young People and Social Change*, Second edition, Open University Press. (=2009, 乾彰夫ほか訳『若者と社会変容——リスク社会を生きる』大月書店). / 乾彰夫, 2010, 『＜学校から仕事へ＞の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店。